別添

令和３年度

都市景観大賞

受賞概要

都市空間部門

景観まちづくり活動・教育部門

「都市景観の日」実行委員会

都市空間部門　受賞地区一覧

大賞　国土交通大臣賞

地　区　名	地区面積	応　募　者
出島地区 （長崎県長崎市）	約1.5ha	・長崎市 ・長崎自動車株式会社 ・出島町自治会 ・江戸町自治会 ・NPO法人長崎コンプラドール ・NPO法人長崎の食文化を推進する会

特別賞　「都市景観の日」実行委員会 会長賞

地　区　名	地区面積	応　募　者
糸魚川市駅北地区 （新潟県糸魚川市）	約17ha	・糸魚川市 ・大町区、緑町区、新七区 ・糸魚川商工会議所 ・糸魚川広域商店街 ・EKIKITA WORKS ・株式会社BASE968 ・株式会社ワークヴィジョンズ

優秀賞　「都市景観の日」実行委員会 会長賞

地　区　名	地区面積	応　募　者
日本橋二丁目地区 （東京都中央区）	約2.6ha	・日本橋二丁目団地管理組合 ・株式会社日本設計 ・株式会社プランテック総合計画事務所 ・Skidmore, Owings & Merrill LLP ・日本橋ガレリアエリアマネジメント
山口県長門市深川湯本地区 （長門湯本温泉） （山口県長門市）	約304ha	・長門湯本温泉観光まちづくり推進会議 ・長門湯本温泉観光まちづくりデザイン会議
さいき城山桜ホール周辺地区 （大分県佐伯市）	約1.86ha	・佐伯市 ・福岡大学景観まちづくり研究室 ・久米設計 ・スタジオテラ ・大分大学建築・都市計画研究室 ・大手前開発市民会議

総評

審査委員長　陣内 秀信

コロナ禍のなかでの今年度は応募状況が心配されたが、嬉しいことにこの数年のなかでも最も多い18件の応募を得た。しかも様々なタイプの景観形成で成果をあげた優れた事例が揃っていた。

失われた歴史都市の空間の復元、大火あるいは大震災・津波後の復興事業、歴史や緑・地形を活かした都心での文化性の高い大規模再開発、逆に地方の小さなまちでの水辺の温泉地区再生や公共施設を核にした市民の空間づくりなど、実に多彩な広がりを見せ、我が国での都市景観への意識の高まりを再認識できた。

なお、審査は一次、二次ともオンライン形式だったが円滑になされ、その間に行われた現地審査も、地元の関係者の方々のご尽力、ご協力で例年同様、滞りなく実施できた。

大賞に文句なく選ばれたのは「出島地区」である。70年に渡り長崎市役所と住民、市民、専門家が総力をあげ官民一体となって取り組んだ出島復元整備の文化事業は、まさに圧巻である。失われた歴史空間を再現すると同時に、アプローチの橋と川を挟んだ対面に市民に親しまれる公園をいずれも最先端のデザインで実現し、歴史と現代が見事に対話する魅力的な景観を創り出すのに成功している。

次に高く評価されたのは「糸魚川市駅北地区」である。大火後の復興という難しい課題に対し、市及び市民が公民連携で修復型まちづくりを推し進め、着実に成果を生んできた。空き家、空き店舗の活用、伝統要素の「雁木」の再生と回遊性の創出など、市民の思いを活かし魅力的な暮らしの場が登場している。今後の景観まちづくりの一つのモデルになり得るこの事業に対し特別賞が与えられた。

そして、異なるタイプの優れた事例である3つの地区が優秀賞に選ばれた。先ず、都心の再開発の成果として高い評価を得たのが「日本橋二丁目地区」である。重要文化財のデパート建築の保存活用を核とし、隣の街区に登場した高層の建物にも基壇部にその高さ、基本構成を受け継いで街路景観に連続性を与えると同時に、その両者の間に設けられたガレリアが回遊性を創出し、景観的にも機能的にも周辺地区に大きく貢献している。

それと対極的なのが「山口県長門市深川湯本地区」である。衰退をたどってきた谷あいの小さな温泉街が、市の強力なイニシアチブのもと、全国で実績をもつ民間事業者の力を得て、川と斜面の地形を活かす卓抜したランドスケープデザインによって、回遊性のある魅力的な21世紀の温泉街として蘇った。もう一つの小さなまちの優秀賞が「さいき城山桜ホール周辺地区」である。旧再開発計画の白紙撤回を受け、市民参加を徹底的に推し進め、公共施設づくりを契機にその周辺に魅力あふれる市民の広場を実現したこの貴重な成果は、地方における今後のまちづくりに勇気を与えるに違いない。

大賞　国土交通大臣賞

出島地区

所 在 地　長崎県長崎市

地区面積　約1.5ha

応 募 者　長崎市、長崎自動車株式会社、出島町自治会、江戸町自治会、NPO法人長崎コンプラドール、NPO法人長崎の食文化を推進する会

地区概要

当地区は、鎖国時代に日本で唯一西洋に開かれ貿易の窓口であった歴史的な場所でありながら、近代以降の土地利用の進展等により往時の景観が失われていた。

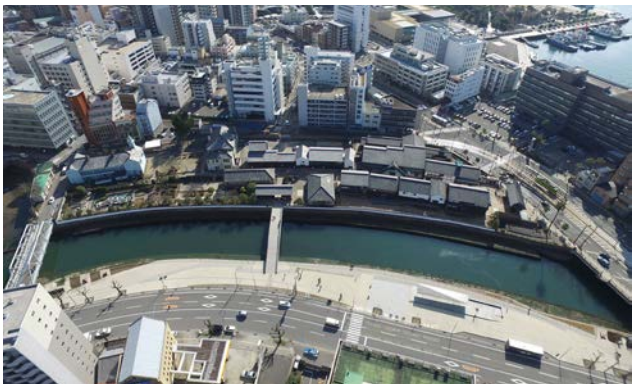
長崎市は、1951年から史跡地内の公有地化を進め、1996年から復元整備事業に本格着手し、これまでに16棟の建造物や石垣等を復元整備し、2017年には出島表門橋と対岸の出島表門橋公園を整備、2020年までにエリア全体の夜間景観整備を進め、約70年をかけて公共空間と建物等が一体となった歴史的景観の再生、夜間の景観等も含めた魅力ある景観の創造を進めてきた。こうした復元整備事業を進めるにあたっては地区住民の理解と協力、さらに、経済界が中心となって集められた約10億円の基金が大きな力となった。

復元整備事業が進み、2006年にゾーン化・有料化されて以降、NPO法人による建造物活用や歴史ガイド、地区住民による長崎くんち、市民団体によるイベント、日蘭交流の拠点等として活用され、2018年には年間50万人の来場者を迎え、周辺地区のみならず市全体の観光交流、にぎわいの拠点となるとともに、市を代表し、市民が誇る景観になっている。

審査講評

長崎の象徴、出島の復元と対岸の公園整備を一体的に実現した、官民をあげての壮大な文化・まちづくり事業の偉大な成果である。失われた重要な歴史的都市空間を広い範囲で復元し、その景観を市街地のなかに再現した日本で最初の試みと言える。発掘調査と信頼できる史料群に基づき、丁寧に復元がなされた。次の段階で、やはり公有化された対岸の土地を公園とし、その中程に出島に入るための表門橋を架ける事業を実現した。縦割りを越え行政の総力をあげた横断的な取り組み、橋・公園の基本設計から実施設計・詳細設計まで一括発注する形でのプロポーザルによる設計者の選定、ワークショップを重ね市民の意見を取り入れて公園を創り上げた開かれたプロセス。これらの画期的な試みが市民、住民の大きな支持を得ながら、質の高い空間、景観を生み出した。史跡に荷重をかけないよう工夫された軽やかで美しい橋、公園の水際に曲線美を描く手摺など、現代の先端デザインの数々が復元された出島と対比的な景観を生み、そこに出島、橋梁、公園の夜間照明も加わって、場所の魅力を一層高めている。観光客に人気の出島の運営、市民が参加する各種イベント、公園での様々な活動には地元住民、市民との協同が望ましい形で実現している。

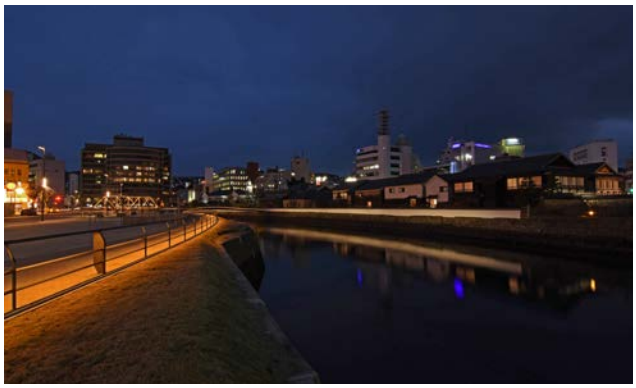
歴史都市長崎の中心部に、過去と現代が対話する素晴らしい都市景観を創出したこの事業は、まさに大賞の名に相応しいものである。（陣内）



2018年に撮影した出島地区の全景。16棟の建造物、石垣、練塀の復元、史跡地内の電線電柱の地中化、出島表門橋の架橋、出島表門橋公園の整備等を約70年かけて実現した。

市民によって活用され、長崎市の観光交流、にぎわいの拠点となるとともに、市を代表し、市民が誇る景観となっている。

2020年に撮影した出島内の様子。写真正面に写る水門まで復元建物による歴史的まち並みが続いている。



出島、出島表門橋、出島表門橋公園をそれぞれ管轄する3つの部局を超えて一体的にデザインした夜景。

特別賞　「都市景観の日」実行委員会 会長賞

糸魚川市駅北地区

所 在 地　新潟県糸魚川市

地区面積　約17ha

応 募 者　糸魚川市、大町区、緑町区、新七区、糸魚川商工会議所、糸魚川広域商店街、EKIKITA WORKS、株式会社BASE968、株式会社ワークヴィジョンズ

地区概要

平成28年12月の糸魚川市駅北大火によって、中心市街地の約4ヘクタールが焼失し、旧北国街道（本町通り）沿いに建てられていた歴史的な建物等が失われた駅北地区において、公共空間の再整備は、被災した地域住民の当地区への帰還と暮らしや生業の再建に向かう意欲を引き出す鍵でもあった。

都市基盤の復旧・復興にとどまらず、糸魚川らしいまち並みの再生と地域の暮らしや営みに根差した景観づくり、防火・防災機能の強化等、行政、設計者と地域住民や事業者がともに考え、意見やアイデアを出し合いながら、復興の先のまちの目指す姿を共有し、景観形成とまちなみの再生に取り組んできた過程は、市民と行政との信頼関係をより強固なものにし、「暮らしを支え、経済活動を支え、シビックプライドを醸成する景観」の実現につながっている。

「糸魚川市駅北まちづくり戦略」に掲げた駅北地区の目指す姿「まちなか大家族－つながり、育む、豊かな暮らし－」の言葉には、人と人、人とまちのつながりを育むことで、市民（大家族）にとって居心地の良い特別な場所にしていこう、という市民の思いが込められている。

審査講評

地方都市の人口減少と空洞化は残念ながら現実である。そこが災害に見舞われた場合の復興は、この現実が加速することを踏まえて臨まねばならない。糸魚川市駅北地区はまずこの文脈において注目できる。歴史的蓄積のある街中が焼失した後のまちづくりは、意思決定の迅速化を最優先するため小規模単位で進め、空地の創出を恐れずむしろ積極的に市が確保した。そうしてできたランダムな公共空間をどう使うかの視点から、連鎖的なまちの営みをエンカレッジする仕組みと空間整備を並走させる。まずマスタープランと空間整備、次に活用というプロセスとは大きく異なり、現実を見据えたチャレンジである。その成果は核となるキターレから離散的にまちの随所に景観として実を結び始めている。見るべきはいまだ整備中の街路景よりも、ここでこうしたいというやる気が見せる場の景である。災害復興に限らず、現代日本の都市景観形成のあり方に一石を投じた事例として特別に高く評価したい。（佐々木）

手前が南側、奥手の日本海が北側。平成28年12月22日の糸魚川市駅北大火直後の平成28年12月25日撮影。
糸魚川駅北大火では約4ヘクタールを焼失。

上が日本海側（北）で、下が糸魚川駅側（南）。中央の東西に横断している通りが「本町通り」。
駅から日本海に連なる市民公園が整備されている。

日本海に最も近い大町潮風市民公園

地域の核の１つとなる駅北広場キターレ

優秀賞 「都市景観の日」実行委員会 会長賞

日本橋二丁目地区

所 在 地 東京都中央区

地区面積 約2.6ha

応 募 者 日本橋二丁目団地管理組合、株式会社日本設計、株式会社プランテック総合計画事務所、Skidmore, Owings & Merrill LLP
日本橋ガレリアエリアマネジメント

地区概要

日本橋駅に隣接し、重要文化財の日本橋髙島屋S.C.本館を含む4街区からなる当地区は、江戸期以降老舗や百貨店が建ち並ぶ国内有数の商業地だったが、平成期には土地の細分化などによりランダムな景観となり活力も低下していた。行く末に危機感を持った地権者がエリア価値向上の必要性を中央区と共有し、都市再生特別地区による再開発事業を行った。

4街区一体の計画により、公共空間と同時に街並みを整備。本館を保存活用し、重文で評価された意匠を再解釈して周辺街区へと発展的に継承した「都市の増築」により、歴史が重層する統一感ある景観を創出した。地上・地下・空中に回遊性が高く地区周辺にもつながる歩行者ネットワークをつくり、新たな賑わいと視点場を生み出した。

区道を歩行者専用道化してガラス大庇を掛けたガレリアを核として、地下駅前広場、地下区道、街角広場、コミュニティスペース、街の東屋、公共エレベータ、3街区をつなぐ空中歩廊、屋上庭園など、多様な居場所が相互に接続し関連している。これらを団地管理組合・エリマネ組織などが連携して管理運営しており、コロナ後や災害時にも適用し得る豊かな屋外空間が、新しい生活文化と地域活性化の可能性を拓いている。

審査講評

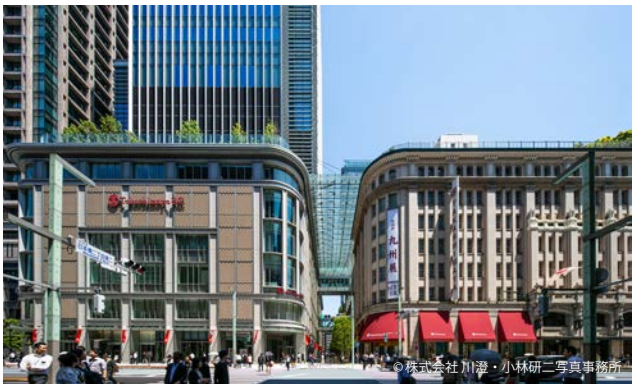
本地区は、日本橋髙島屋本館とその周辺街区を対象とした都市再生プロジェクトである。高橋貞太郎設計の髙島屋本館は、村野藤吾によって増改築が行われ、重要文化財の指定を受けている。本プロジェクトではその保存活用が課題となるが、隣接街区について高さ、ファサードなど調和をもって設えるとともに、各街区の地下空間を結びつけて自動車動線の整理を行い、建物の間の空間（片持ちで大屋根も実現）及び街区周辺に歩行者空間を確保するとともに、屋上自動車駐車場の撤去を行い屋上にも街区を結びつける歩行空間を広げている。

また、オフィス入口を中央通り側に設けない、北街区の敷地を一部取り込む、敷地内地下空間を地下鉄駅と一体で整備するなど、隣接地域との関係も意識した計画が実現されている。

都心部における重要文化財を活用した都市再生プロジェクトとして良質な都市景観を形成しており、十分に「優秀賞」受賞に値するプロジェクトであると判断される。（岸井）

南西側鳥瞰。
手前のB街区、右のA街区、左奥のC街区、その奥に隠れたD街区の一体的開発。

中央通り南西側からの景観。
重要文化財から連なる街並みと、現代的な高層部の対比。



中央通り側ファサード。
新旧の建物が響き合い、中央の日本橋ガレリアにより統合されている。

日本橋ガレリアを東から見る。
車両出入口や通用口のあった裏通りが、賑わいの核へと変貌した。

優秀賞　「都市景観の日」実行委員会 会長賞

山口県長門市深川湯本地区（長門湯本温泉）

所 在 地　山口県長門市
地区面積　304ha
応 募 者　長門湯本温泉観光まちづくり推進会議、長門湯本温泉観光まちづくりデザイン会議

地区概要

長門湯本温泉は、山口県北西部に位置し、周囲を山々に囲まれた谷あいにある小さな温泉街である。

昭和58年をピークに約30年にわたり宿泊者数は減少。平成26年には創業150年の老舗ホテルが廃業し、温泉街に遊休地が広がり更に厳しい状況に陥った。長門市は温泉街だけでなく市全体の危機と捉え、廃業ホテルの建物を解体して土地取得を決意。星野リゾートを誘致するなど、遊休地を活用した再生に乗り出した。

平成28年に星野リゾートと協働で温泉街再生のためのマスタープランを策定。行政が見合う事業投資を検討するという逆転の発想で、圧倒的なランドスケープデザインにより“そぞろ歩きが楽しめる温泉街”を実現し、全国温泉地ランキングトップ10入りの目標が掲げられた。

温泉街の整備は、プロジェクト司令塔や建築・ランドスケープ・夜間景観・交通・観光・金融・広報の専門家、地元有志で構成され実務検討を担うデザイン会議と意思決定を担う推進会議を組成。公共投資主導ではなく官民での事業推進体制を構築し、平成29年から本格的に着手した。

3年に渡る整備を経て、魅力的で非日常を味わえる温泉街へと変貌を遂げ、新たな観光地として生まれ変わった。

審査講評

対象地区は山口県の日本海に近い山あいの小さな温泉街である。地域再興のため、外部の著名人等を呼び込み再整備を進めるといった方法は良くみられるものの、そういった方法で成果を挙げられる場所はある程度限られるように思うのだが、当地区は少し状況が異なる。一つは全国温泉地のトップ10入りを目指す、というややとてつもない目標が掲げられていることである。それが外部の有能な人々を惹きつけ、地域の力にしたのではないかと思える。また全国で活躍しているこの外部の人たちの多くが、自ら資産を持つという形でこの取り組みに参加している状況にも着目される。計画や作られた景観について評価すべきは、思い切った計画を躊躇なく実行したこと、といえるだろう。当初描かれた全体構想は、対象とされた土地の範囲を超え、温泉街の他の人の土地にも遠慮なく描かれ、そして実行された。そしてかなり手の込んだ照明計画もまた、実行された。総じてデザインは高いレベルを保っているものの、一部にはやや疑問を持つ解答も含まれる。しかしながらそれを超える充実されたソフト面での取り組みと成果も含め、優秀な取り組み例として評価した。（高見）

当地区は、音信川沿いに広がる県内最古の歴史をもつ温泉街である。

駐車場から雁木広場までを結ぶ竹林の階段。夜間は幻想的な空間となる。

雁木広場は、自由度が高く、回遊性と川辺の景観を楽しめる空間を演出。
再建された恩湯（右）と長門市の食材が味わえる恩湯食（左）

川のせせらぎを聞きながら開放的な空間でくつろぐことのできる川床。

優秀賞　「都市景観の日」実行委員会 会長賞

さいき城山桜ホール周辺地区

所 在 地　大分県佐伯市

地区面積　約1.86 ha

応 募 者　佐伯市、福岡大学景観まちづくり研究室、久米設計、スタジオテラ、大分大学建築・都市計画研究室、大手前開発市民会議

地区概要

かつて佐伯の文化や活力の象徴として市民の思い入れの強かった大手前地区。一度は再開発事業が白紙撤回されるという市民の行政不信状態から、徹底した市民参加プログラムを経て、城山や周辺まち並み、隣接エリアとの繋がりを考慮した複合文化交流施設および広場、バスロータリー等の一体的整備がなされた。

市民会議によって提案された「いつでも誰でも気楽に集まれる場所」等をコンセプトに、長らく空き地となっていた大手前地区の閑散とした風景を、日常的に「人がいる風景」へと再生させた。また当該地区の整備によって既存文化ホールやバス停留所の老朽化、人と大型車の動線の交錯といったまちの課題を解決し、さらに新たな動線をつくり出すことで地区内にある既存商店街への波及効果を促す工夫も施された。

まちのランドマーク地区として生まれ変わった大手前の当該地区は、現在も商店街との連携や各種文化・交流企画の実施、さらに市民代表からなる運営委員会が市民提案の自主事業を進めるなど、佐伯市民の文化と活力を取り戻す新たな拠点となっている。

審査講評

地名の由来は中世にまで遡り、後に毛利氏によって築城され今もなお城下町の名残が散見される風向の良い港町である。城石垣が残る城山は街の象徴でありホールの名称にも採用されている。対象地区は近代以降商業の中心地として栄え、九州最大手の大型商業施設発祥の地として賑わいの中心であった。しかし、郊外型店舗の急速な進出によって大型商業施設が撤退し中心地の空洞化が加速した。最初の再開発計画は市民の反対運動によって白紙撤回に追い込まれた。その後市民会議の発足、専門家の参画によって合意形成がなされ、市民や高校生達の意見を取り入れた提案書が作られ、市民本位の施設実現に向けて大きく舵が切られた。中核を成す複合施設の謳い文句は「人がいる風景」である。透明性を保ち、周囲からアクティビティが見えることで内外のつながりが生まれた。食文化を広めるためのキッチンコートも市民の要望で誕生した。街並みへの連携はホール屋根の分節化や広々とした芝生広場により実現している。交通広場の移動と再編、芝生マウンドによる国道への遮蔽効果も人の場所づくりに貢献しているようだ。今後、周辺の歴史的街並みと連携した新たな回遊性が生まれることに大いに期待したい。（富田）

城山からの眺め。ホールの整備にあわせて既存商店街の西側（写真右）にバス停留所を移設。

ホールの北側には広場（さくらごろごろパーク）が整備され、子ども達の日常的な遊び場となっている。

市道側はホールの軒が低く抑えられ、落ち着いた質感の舗装で船頭町まで続いている。

夜間は透過性の高いホールからの明かりや内部で活動する人々の様子が地区内の景観演出に寄与している。

景観まちづくり活動・教育部門　受賞活動一覧

大賞　国土交通大臣賞

活　動　名	活動エリア	応　募　者
清水港・みなと色彩計画	静岡県 静岡市	・清水港・みなと色彩計画推進協議会 ・静岡市

優秀賞　「都市景観の日」実行委員会 会長賞

活　動　名	活動エリア	応　募　者
SAPP_RO フラワーカーペット	北海道 札幌市	・サッポロフラワーカーペット実行委員会
町歩きガイドツアー 「古地図を片手に、ぶらり萩あるき」	山口県 萩市	・NPO萩まちじゅう博物館 ・NPO萩観光ガイド協会 ・浜崎しっちょる会 ・須佐地域史跡案内ボランティアガイドの会 ・萩往還佐々並どうしんてやろう会 ・萩市

総評

審査委員長　小澤 紀美子

本部門への応募は、コロナ禍の影響を受けて減少したことは残念ですが、応募いただいた活動は独自性にあふれ魅力的な取組みでした。

まず、書類に記述されている内容で、専門とする審査員の各分野の視点から活発な議論のもと第一次審査を行いました。景観まちづくり活動・教育部門としての評価のポイントは、取組みが①継続的に行われていること、②フィールドとする地域とのかかわりや連携がとれていること、③実施方法や内容の工夫など独自性があること、④活動や教育を行う対象との双方向性や対話性があること、さらに⑤活動成果の地域への顕著な効果の発現やその発現が期待できること、です。

こうしたポイントから現地に赴いて、専門的な視点からも評価を確実に行うこととし、現地視察・調査の対象を絞り込みました。第二次審査では、現地視察・調査の結果を各担当の審査委員がパワーポイントでのプレゼンを行い、今年度は大賞として 1 件、優秀賞として 2 件を選定しました。

受賞された各取組みや実践に関しての評価に関しては、各審査講評を参照していただきたいと思います。評価されたそれぞれの活動は地域の活性化や持続性をめざして、地域の住民の方々や次世代を担う方々との連携、さらに学び合う関係づくりをしながら人材育成など着実に進めておりました。さらに活動の効果の発信に向けて多大な努力が行われているといえます。次年度も、多彩な活動による全国各地の成果の応募を期待したいと思います。

なお今回、惜しくも受賞の逃した団体の活動にも評価すべき点がありました。本部門の評価としての先に述べた 5 つの評価のポイントを配慮していただくと共に、連携がカタチだけに終わらずに、地域の魅力を高め、その魅力に磨きをかけて、より有機的な協働にまで及ぶようにしていただき、活動が地域に浸透・深化していくことを期待しております。なお応募申請書の記述内容だけでは、地域の魅力を十分に理解できない内容や地域への波及効果が読み取れないものもありました。今後とも、景観まちづくり活動・教育活動を継続していただき、申請書の書き方を工夫していただき、再度の応募を期待しております。

大賞　国土交通大臣賞

清水港・みなと色彩計画

活動エリア　静岡県静岡市清水区

応　募　者　清水港・みなと色彩計画推進協議会、静岡市

活動概要

清水港・みなと色彩計画は、平成3年に全国に先駆けて策定した色彩ガイドプランである。

清水港は戦後、経済成長を支える重厚長大産業の空間となる一方で、市民にとって近寄りがたい存在となっていた。女性23名で 構成された「レディズ・マリン・フォーラム」が、暮らしの視点から港を見直し、「美しいみなとまちづくり」を提言した。本提言を受け、色彩・景観に関する専門家と地元企業の代表等により、色彩による清水港らしさ（アイデンティティ）の実現を目指す計画が始まった。

本計画は、地域による主体的な取組を実現するための配色構成と、仕組みづくりに特徴がある。計画の策定に当たっては、ステークホルダーの声を反映し、富士山及び駿河湾と調和するシンボルカラー（アクアブルーとホワイト）を設定、港湾機能ごとの空間イメージを定め、清水港独自の景観づくりを目指してきた。

補助金・減税等の公的支援の無い中で、事業者が行う塗替え・改築等の時期に合わせた参画要請や、随時行われる色彩・景観に関する相談の中で、各企業のコーポレートカラーの使用、CG を活用した配色デザインの提案など、対話型の仕組みをブラッシュアップしている。

本計画は令和3年度に 30周年を迎えるが、時代の変化に合わせて計画を改定している。今後も港湾関連事業者、国・県・市の行政、市民がそれぞれの立場で役割を果たしながら、共創の取組により清水港の魅力を高めていく。

審査講評

清水港の取り組みは色彩計画という言葉では正しく表現できない。30年以上にわたって取り組まれてきた港の風景の再デザインであり、その成果はこの風景を担うべく醸成された地域社会そのものである。

港に連なる建屋の屋根の色彩はある範囲に収まりつつ微妙に色合いが異なり、単なる統一ルールでできた姿ではないことが伝わる。施設は時に抑制的に時に戦略的にデザインされ、丁寧な検討と協議が重ねられたことがわかる。港湾関連事業者は世界の港を見ているので意識が高いのだという。各社が工夫を凝らし、専門家のアドバイスを得ながら風景をひとつひとつ洗練させてきた。その動きは臨港地区の外側にも広がりをみせている。

日本平から港を眺めると、海と山のあおと港のあおが引き立てあい、その向こうに富士山がそびえる風景が楽しめる。この風景を眺めて育った若者は心からふるさとを誇りに思えるだろう。

港湾を管理する県、まち全体に責任を持つ市、物流・工業・商業などを営む事業者、将来を担う若者たちを含む市民、全体を見渡す専門家。港にかかわる全ての主体がそれぞれに磨き上げた清水港は現代日本を代表する美しいみなとまちである。（福井）

シンボルカラーによりデザインされたガントリークレーンが、
富士山と調和した景観を形成している。

赤白からシンボルカラーへ塗り替えられた煙突。
地元住民・事業者・行政が一体となって実現した、計画を象徴する取組。

サイロ等の産業景観を背景にイベントを楽しむ様子。
市民にとって近寄りがたい港から、賑わい・憩いの場へと変わっていった。

毎月実施する色彩相談会において、
事業者と協議しながら取組を進めている。

優秀賞　「都市景観の日」実行委員会 会長賞

SAPP_RO フラワーカーペット

活動エリア　北海道札幌市中央区 札幌駅前通地区
応　募　者　サッポロフラワーカーペット実行委員会

活動概要

サッポロフラワーカーペットは、市民参加型のパブリックアートのイベントとして、札幌のメインストリートである札幌駅前通と北海道庁赤れんが庁舎との間に位置する札幌市北3条広場をメイン会場に、2014 年から開催してきた。

フラワーカーペット（花びらや自然素材を用いた花絵）は市民ボランティアや近隣のオフィスワーカー等の参加者によって制作される。誰でも参加することができる簡単な作業であり、それがこの活動の目的の一つである「老若男女・国籍を問わない制作作業を通した多文化共生の推進」に繋がっている。

完成した色とりどりのフラワーカーペットは参加者の手でつくられたものであり、こうした風景が、参加者のこの地区に対する愛着や大切にしたいと思える景観形成に繋がっている。また、北海道庁赤れんが庁舎の景観とも相まって、札幌の初夏ならではの風景を創り出しており、道内外から訪れた人々を楽しませている。

審査講評

北海道庁赤れんが庁舎前の「札幌市北3条広場」（通称アカプラ）は、2014年8月にオープンした。広場に面する民間施設の協力によって道路と壁面後退部分が一体的になった魅力的な広場空間が生まれ、2015年度の都市景観大賞「都市空間部門」優秀賞を受賞した。

広場オープン時にイベントとして開催されたフラワーカーペットが好評を得たため、翌年実行委員会を設け、地元企業の協力や寄付を得ながらすでに 5年実施してきている。実施にあたっては、当日のボランティアはもちろん、制作リーダーの育成、地元の大学へのデザイン依頼など、地域への働きかけも積極的に進めている。また、開催場所も民間の公開空地や屋上広場等すでに 4箇所に広がりつつある。魅力的な都市広場において市民参加型で利活用する事業を企画運営し、札幌を代表するイベントとして展開させてきたことは、高く評価することができる。今後もアイデアあふれる広場の利活用を期待したい。（卯月）

フラワーカーペット完成後に撮影した、制作ボランティアの集合写真

フラワーカーペットのまわりにキャンドルライトを灯して演出している様子

下絵に沿って花びらをならべる作業の様子

フラワーカーペット内に入って直に花びらに触れることができるフリーウォーキングの様子

優秀賞　「都市景観の日」実行委員会 会長賞

町歩きガイドツアー「古地図を片手に、ぶらり萩あるき」

活動エリア　山口県萩市 堀内伝建地区、史跡萩城城下町、浜崎伝建地区、須佐武家町、佐々並市伝建地区

応　募　者　NPO萩まちじゅう博物館、NPO萩観光ガイド協会、浜崎しっちょる会、
須佐地域史跡案内ボランティアガイドの会、萩往還佐々並どうしんてやろう会、萩市

活動概要

萩市は、この地に訪れた人々に対して、市民が「主」、訪れ人が「客」として、客を迎え入れる「おもてなし」の体制を整え、住民や行政のみならず、訪れる方々も一体となったまちづくり・観光地づくりとして「萩まちじゅう博物館構想」を推進している。

萩まちじゅう博物館構想とは、まちじゅうがまるで屋根のない博物館のような萩のまちを次の世代に引き継ぐため、素晴らしい歴史や文化、自然を守り活用する取り組みである。

その展開にあたり、良好な景観が地域の魅力の基盤となるとともに、景観の活用が新たな観光地づくりにつながっている。

活動の一つである「古地図を片手に、ぶらり萩あるき」は、歴史的な景観が残る地区をめぐる、まち歩きガイドツアーで、古地図を片手に、昔とほとんど変わることのないまちなみを感じることにより、その歴史的まちなみ景観の保全を理解してもらい、継承へとつなげている。

審査講評

萩市は、地形的な特色から江戸時代の地図がそのまま使え、古代から藩政期・明治維新さらに現代へと連綿とつながる「時」が日常やまちの表情を彩っている、『まちじゅう屋根のない博物館』である。その彩りは「まち歩きボランティア」による「対話型」案内で理解が深まる。昭和時代に地域の資産価値に気づき、歴史的景観保存条例を制定して景観の保存への努力を積み重ねてきた上に、「萩まちじゅう博物館条例の制定」による地域のプライドを醸成してきたことは高く評価できる。条例に曰く、萩にしかない宝物を次世代に確実に伝え、「萩を終の住処にして良かった」と日々実感できるような魅力あるまちづくりに努め、萩を訪れた人々に萩の良さや歴史を、愛着と誇りを持って伝えることで、「日本の心のふるさと」と思われる、おもてなしをまちじゅうで推進することを決意し、暮らしを美しく育んでいる「風」が風土・風景・風格・風情を生み出し、おもてなしのスピリッツがにじみ出ている点も高く評価された。次世代への「知の継承」がいっそう推進されることを期待したい。（小澤）

古地図と現代の地図を重ね合わせたもの

堀内伝建地区のガイドツアーの様子

浜崎伝建地区でのガイドツアーの様子

須佐武家町でのガイドツアーの様子

令和３年度 都市景観大賞について

令和３年度は、下記の通り「都市空間部門」と「景観まちづくり活動・教育部門」について募集しました。

Ⅰ 都市空間部門について

１. 表彰目的

都市景観大賞「都市空間部門」は、良好な都市景観を生み出す優れた事例を選定し、その実現に貢献した関係者を顕彰し、広く一般に公開することにより、より良い都市景観の形成を目指すものです。

２. 表彰内容

① 大賞（国土交通大臣賞） …… １地区
② 特別賞 …… 内容に応じ、適宜選定
③ 優秀賞 …… 数地区

３. 対象地区の要件

本賞は、街路や公園等の公共空間とその周りの宅地・建物等が一体となって良質で優れた都市景観が形成され、それを市民が十分に活用することによって、地域の活性化が図られている地区を対象とします。単独の公共施設、建築物、構造物は対象になりません。

４. 応募者の資格

良質で優れた都市景観の実現に深く寄与した地方公共団体、まちづくり組織、市民団体、民間企業・コンサルタント、独立行政法人、公社等とします。

※多くの関係者による共同応募が望ましいですが、単独でも応募者になれます。
※応募者に地方公共団体が含まれない場合には、地方公共団体の確認を得たうえで応募してください。

５. 審査

「都市景観の日」実行委員会内に設置される都市景観大賞審査委員会において、応募図書等をもとに、内容を審査（書類選考、現地視察、ヒアリング）した上で、表彰地区を選定します。

６. 審査委員

［委員長］
陣内　秀信　法政大学特任教授、中央区立郷土天文館館長
［委　員］
池邊このみ　千葉大学教授
卯月　盛夫　早稲田大学教授
岸井　隆幸　(公財)都市づくりパブリックデザインセンター理事長、日本大学特任教授
佐々木　葉　早稲田大学教授
高見　公雄　法政大学教授
田中　一雄　（株）GK デザイン機構代表取締役
富田　泰行　トミタ・ライティングデザイン・オフィス代表取締役
国土交通省　都市局公園緑地・景観課長
国土交通省　都市局市街地整備課長
国土交通省　住宅局市街地建築課長

（順不同、敬称略、令和３年３月時点）

Ⅱ 景観まちづくり活動・教育部門について

１. 表彰目的

都市景観大賞「景観まちづくり活動・教育部門」は、地域に関わる人々が景観に関心を持ち、自らの問題として捉え、その解決へ向けて活動できるよう意識啓発、知識の普及、景観法や景観に関する制度等（以下「景観制度」という。）を活用した取組等による活動を選定・顕彰し、広く一般に公開することにより、より良い都市景観の形成を目指すものです。

２. 表彰内容

① 大賞（国土交通大臣賞） …… １活動
② 優秀賞 …… 数活動
③ 特別賞 …… 内容に応じ、適宜選定

３. 対象活動の要件

景観まちづくり教育の実施や、街歩きや景観に関するセミナーの開催、景観制度を活用した取組など景観まちづくり活動の実施による良好な景観形成等のための活動を地域に根差して行っており、それらが地域の人々の景観への意識・関心の高揚等につながっている優れた活動を対象とします。

４. 応募者の資格

景観まちづくり活動や景観まちづくり教育による意識啓発、知識の普及、景観制度を活用した取組などを行っている、学校、まちづくり組織、市民団体、地方公共団体などで、かつ、地域に根差した活動を３年以上継続して実施している団体とします。

５. 審査

「都市景観の日」実行委員会内に設置される都市景観大賞審査委員会において、応募図書等をもとに、内容を審査（書類選考、現地視察、ヒアリング）した上で、表彰活動を選定します。

６. 審査委員

［委員長］
小澤紀美子　東京学芸大学名誉教授
［委　員］
卯月　盛夫　早稲田大学教授
楚良　　浄　世田谷区玉川小学校指導教諭
福井　恒明　法政大学教授
国土交通省　都市局公園緑地・景観課長

（順不同、敬称略、令和３年３月現在）

■主催：「都市景観の日」実行委員会＊下線は協賛団体も兼ねています
（公財）都市づくりパブリックデザインセンター、（公財）都市計画協会、（一社）日本公園緑地協会、（独）都市再生機構、（一財）民間都市開発推進機構、（公社）日本都市計画学会、（一財）都市みらい推進機構、（公社）街づくり区画整理協会、（一社）日本屋外広告業団体連合会、全国景観会議、都市景観形成推進協議会、歴史的景観都市協議会、全国街路事業促進協議会

■後援：国土交通省

■協賛団体：
（一財）都市文化振興財団、（一財）計量計画研究所、（公財）区画整理促進機構、（公社）日本交通計画協会、（一社）再開発コーディネーター協会、（一社）日本造園建設業協会、（一財）公園財団、（一社）ランドスケープコンサルタンツ協会、（公社）日本下水道協会、（公財）自転車駐車場整備センター、（公社）立体駐車場工業会、全国土地区画整理事業推進協議会、都市再開発促進協議会

■事務局：（公財）都市づくりパブリックデザインセンター
〒112-0013東京都文京区音羽２丁目２番２号 アベニュー音羽２階　TEL 03-6912-0799　URL https://www.udc.or.jp